

波

崎

碇（いかり）石

篠塚姓は武將の末裔

今から約六百五十年前の南北朝時代、源氏一門の名將・新田義貞の四天王だった篠塚伊賀守重広（しげひろ）は、身の丈六尺五寸（一・九五メートル）、源氏の血を引く剛勇無双の武將だった。

新田源氏は、足利源氏との一門の攻防に敗れ、重広は伊予国（愛媛県）に下向していた。

瀬戸内の因島から沖島へと渡り、更に正平年中（南朝一三四六〜六九年）村上水軍の軍船を奪い、再び関東に帰った。銚子沖から波崎に上陸、本郷の豪農（現在の篠塚権右衛門家）へ数年間逗留、隠遁生活を送った。

同家への長期逗留は、地元ではあまり知られていない。だが、それを裏付けるものは同家の広い土地内に伊賀守上陸記念の「碇（いかり）石」など縁のあつたもの、伊賀守の縁者、従者がいたことなどがあげられる。

碇石は現在、同家近くの本郷区内・宝蔵院・万徳寺（真言宗智山派）境内にあることでも同家の規模や当時を偲ぶことができる。

「碇石」というのは、軍船に使っていた石の錨（イカリ）で、寺の境内から道路を隔てたタブの巨木がある雑木林の中にある。石は、巨木の根本にあり、半ば傾いて立っており、その約半分は地中に埋まっている。

形態は、細長い角状の石で、地上の法量は縦一・三〇メートル、横幅二四センチで中程がくびれている。総長は推測だが、二メートル以上あるものとみられ、重量も二百キログラムとも三百キログラムともいわれている。この石は通称「紫雲石」（し

うんせき」と呼ばれ、水をかけたり雨に濡れると青紫色が出る九州産の珍しい石。

宝蔵院の寺伝によると、寺は篠塚伊賀守の祈願所となり、寺宝の阿弥陀如来像は伊勢守重広の兜(かぶと)につけてあつた仏像を胎内仏とし、この如来像を等身大にしたものが「宝蔵院の阿弥陀さま」だ……と伝えられている。

礎石の由来について、波崎町史料集に「本郷区ニアリ、下部八地中ニ埋没シ、其ノ上半部数尺地上ニ突起シ繪レ目アリ、之レ結索ノ所ナリト言フ、石ハ青色ニシテ堅硬ナリ、氣中ニ水蒸氣多キ時ハ多少水分ヲ吸収スルニヤ、著シク青紫色一見ユト伝フ」とある。また、他の記録によれば「篠塚伊賀守八船ニテ此ノ地ニ来タリ上陸シ、此ノ礎ヲ上陸記念トシテ据ヘ置キ、此ノ地ニ住シ、雲烟野鳥ヲ友トシテ一生ヲ送ラムト計画セシガ後思フ所アリ 従等ヲ残シ、漂然ト此ノ地ヲ去リタリト言フ。今上野国(今の群馬県)邑楽郡長柄村字篠塚ノ大信寺ニ其ノ位牌ヲ安ズルト言フ。一説ニ伊賀守ハ此ノ地ノ人ナリト、サレバ故郷忘レ難ク或ハココニ隠遁セシヤ」と記してある。

この礎石を保存管理している本郷の篠塚総本家筋に当たたる篠塚権右衛門宅・篠塚権一郎氏(家紋・笹りんどろ)方では、伊賀守以来、三十四代と伝えられ、約二千坪(六千六百平方尺)の広い敷地内に住まいがある。

その昔、同家は一町歩の屋敷だったという。その一族は本郷区に多く、篠塚藤一郎さん、篠塚庄一さん、篠塚和衛さん、篠塚隆一さん、沼田修一さんなどが中心になっている。また、権一郎さんの屋敷内には伊賀守に随行了した船頭さんをまつた石宮があり、本郷区の鎮守・神明神社になっている。

区では毎年九月十九日、伊賀守漂着記念日として祭礼を行っている。

このほか、礎石の付近には昔の入り江跡がわずかにその名残をとどめる橋の跡があり、昔はその場所へ船がついたと伝えられている。

篠塚姓は波崎町本郷区だけでなく、対岸の銚子市、東庄町、佐原市などに多く見られ、これらの氏族は篠塚伊賀守の末裔(まつえい)といわれている。